

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 五月女 颯

本論文は、ジョージアの作家・詩人イリア・チャヴチャヴァゼ (1837-1907)、ヴァジャ＝プシャヴェラ (1861-1915) の作品を通して、19 世紀以降ロシア帝国の支配下に置かれたジョージアの近代文学を、ポストコロニアルの観点ならびに環境／動物批評の観点から検討するものである。本論文は 2 部から構成され、第 1 部ではチャヴチャヴァゼが、第 2 部ではヴァジャ＝プシャヴェラが主に分析されている。

第 1 部では、まず第 1 章でジョージアのポストコロニアル研究の動向を概観し、第 2 章でチャヴチャヴァゼの旅行記「旅行者の手紙」に見られるアイロニーの分析が、第 3 章では地詩学の観点から同作の分析がなされる。続いて、ロシアの作家ゴンチャロフの『オブローモフ』とチャヴチャヴァゼの「彼は人か!？」の比較を通して、「教育＝啓蒙」を揶揄する風刺分析 (第 4 章)、物語構造の比較と対位法的読解 (第 5 章) が試みられる。「ロシア」を直接参照せず、啓蒙的な語り手を導入することで、ロシアとは異なる啓蒙や近代性のジョージアでの普及を意図したチャヴチャヴァゼという興味深い指摘がなされている。

第 2 部では、環境／動物批評の視点を加えた上で、分析が行われる。まず人種差別と種差別をポストコロニアリズムと環境／動物批評の交点と位置づける議論 (第 6 章) がなされたのち、ヴァジャ＝プシャヴェラの叙事詩「蛇を食う者」における動物の擬人法を中心に読解が行われる。第 7 章、第 8 章では、デリダの動物論を参照しつつ、詩の主人公が蛇を食べる行為が検討され、主人公が木の伐採や獣の狩猟を止め、花や麦穂が自己を薬や食料として捧げる行為に自然の行為主体性を見出そうとする。第 9 章では、自己供儀という視点から宮澤賢治の童話「なめとこ山の熊」との比較を行ったうえで、人間と自然の経緯に満ちた相互依存の関係が提示される。人間に限定されるヒューマニズムを非人間にまで拡張する「パンヒューマニズム」の可能性に触れ、本論は結ばれる。

本論文はジョージア文学に関する日本語で初めての博士論文であり、ジョージア語のみならず、ロシア語、英語文献の緻密なテキスト読解に裏付けられた知見を通してジョージア近代文学に関する考察を行った意義は大きい。また、ポストコロニアリズムと環境／動物批評の議論を見事に連結させ、本論文の議論が他の地域の文学作品でも応用可能である点を示したことも高く評価された。

言及されるロシア文学の解釈については他の可能性がありうること、またジョージア近代文学の状況に関する記述はやや物足りないといった指摘もあったが、本論文の主旨を損なうものではないことは確認された。

よって、本審査委員会は、本論文が博士 (文学) の学位に値するとの結論に達した。